

宗教的多元性の諸問題 —東アジアのキリスト教の比較研究—

京都大学
芦名定道

1 COE研究会を振り返って

わたくしは、まずこれまでのCOE研究会（23研究班）における共同研究を振り返り、また、先ほどの澤井先生の基調講演との関連も明らかにしつつ、今回のシンポジウムの意図と問題意識を明確化し、その上で、わたくし自身の立場から、若干の議論を行ってみたいと思います。

（1）本研究会の目的

本研究会（23研究班）の共同研究は、当初次のような問題意識と目的で始められた。

「現代世界におけるグローバル化の進展は、アメリカの政治軍事力を背景にして、アメリカ的価値観をスタンダードとする文化的運動を引き起こしている。そのなかで地域固有の「ローカル文化」と世界的規模をもつ「普遍文化」との表面上の相克は激化しているように見える。人種、民族、性、宗教といったカテゴリーが歴史的につくりあげてきた人間集団の実体化と相互対立が、21世紀の現代世界の一つの特質となっている。また国民国家の成立によって均質化されたはずの国民社会内部においても、その支配的規範から逸脱してみずからをマイノリティとして積極的に差異化していく下位集団が続出している。

本研究は、こうした異なった価値意識や社会規範、行動規則などをもつカテゴリーに属する人々同士が、日常的実践のなかでいかに、世界観を競合させながら折り合いをつけていくかという社会過程に注目する。そして寛容性をキーワードにして、異なったシステムとそれにもとづく実践が、現実社会のなかでいかにして再編成され社会秩序を生成していくかについて、実証的な研究を行っていく予定である。

具体的には、現代日本社会内部で逸脱者と見なされる人々に対するマジョリティの側の対応の仕方を調査して、社会の寛容性の度合いを実証的に分析する共同調査や、世界宗教としてのキリスト教が、欧米を中心とする近代化の文化要素として韓国やアフリカ社会に浸透して行く過程で、先行して定着していた諸要素とのあいだでどのような軋轢を生み、それがどのように再編成されていったのかについて解明しようとする共同調査などが計画されている。」（21世紀COEプログラムのWebより）

（2）研究目的の具体化

以上の研究目的は、次のような課題として具体化された。

1. 多元性に伴う様々な問題状況に即した「寛容」のあり方（寛容性の社会的生成プロセス）を、実証的に捉え、多元的世界における寛容論の構築を試みる。
2. 理論的アプローチと実証的フィールドワークとの有機的な統合を試みる。つまり、宗教学的的思想的研究方法と社会学的研究方法との双方を視野に入れつつ共同研究を

進め、それを通して、多元的人文学の具体化をめざす。

3. 「宗教」「東アジア」「公共性」という観点から研究の集約を行う。

(3) 研究の実施状況

研究会の活動としては、隔月の全体研究会とそれと並行した行われたサブ研究会（若手による「宗教的寛容研究会」）、また多様なフィールド調査を含んでいるが、大きく次のようなステップで進められた。

1. 第一ステップ（2002、03年度）：参加メンバーが各自の問題関心に即して、現代の多元的状况下における寛容性について、理論的あるいは実証的な視点から研究発表を行い、問題の広範な広がりを確認する共に、共同研究の具体的な方向性を決定する作業を行った。

2. 第二ステップ（2004、05年度）：多元的世界における寛容性というテーマに対して具体的に共同研究という形でアプローチするために、問題を、「宗教」「東アジア」「公共性」という仕方で絞り込み、研究発表に基づきに討論を行った。また、東アジアの宗教的多元性に関連したフィールド調査を集中的に実施した。

3. 第三ステップ（2006年度）：国際シンポジウムと報告書出版という形で研究会活動を集約する。

(4) 本日のシンポジウムの問題へ

本研究会においては、これまで、日本、韓国、中国で国際会議（シンポジウム、ワークショップ、セミナー）を実施し、また本年度中に報告書の出版を予定しているが、研究会の当初の目的については、東アジアの宗教的多元性における寛容性（宗教的寛容、宗教間対話）を焦点として、ある程度まで達成することができたと思われる——とくに、若手研究者の育成や東アジアにおける研究者のネットワークの形成など——。しかし、達成された研究成果といっても、一つの完結した理論形成がなされたわけではなく、むしろ研究会メンバー各自にとっては、今後の研究にとって多くの手がかりを与えられたと言うべきかもしれない。本シンポジウムでは、これまでの研究会での議論をふまつつも、今後、いかなる方向へ研究を展開すべきかについて展望し、これからも様々な仕方で行われるであろう共同研究の基礎を確認したいと考えている。なお、研究会においてこれまで取り上げられた多様な問題から、このシンポジウムでは、東アジア、多元性と寛容、宗教といった問題領域に議論の中心を置くことにしたい。

わたくしに続いて、三人のパネラーの方々にはそれぞれの研究のフィールドとテーマから提題をいただくことになっているが、わたくしも、与えられた残りの時間の範囲で、自分の視点から提題を行うことにしたい。

2 宗教的多元性の諸問題

わたくしは、これまで近現代のキリスト教思想を主なる研究領域としてきたが、近年、キリスト教思想においても、宗教的多元性にめぐり活発な議論が行われてきている（芦名、1994）。それは、現代の宗教的多元性の状況が単なる過渡的な問題ではなく、むしろキリスト教思想の本質に関わる問題であること、また多元性と様々なリンクした対立と相克の現実に対処するには、宗教間対話などによる宗教間の相互理解・連帯・寛容性が不可欠で

あることなどが自覚されてきているからに他ならない。実際、そのために多くの努力がなされてきている——宗教の神学、エキュメニズム——。しかし、宗教間対話の実践においても、またその思想的基礎の解明においても、議論はあまりにも不十分な段階にとどまっております、その点で、キリスト教思想研究は、現在袋小路に陥っていると言わざるを得ない。

実際、現代の宗教研究においては、「対話」に対する厳しい批判が少なくない。たとえば、藤原聖子は、日本宗教学会学会誌の「特集：近代・ポスト近代と宗教的多元性」への寄稿論文「空転する「対話」メタファー」で次のように論じている。

1. 「宗教間対話論の一番の欠点は、解決すべき問題の認識とその対処法としての理論、つまり目的と手段がマッチしていない、という非常に基本的なところにある」(藤原、2001、127頁)。つまり、宗教間対話の必要性について、しばしば「宗教対立・紛争の解消に貢献する」(目的)ことが主張されるものの、「学び合いとしての対話実践」という仕方での宗教間対話(手段)はその目的の実現に直結するものではない。

2. 「宗教者の中には対話をすること自体に価値を置かない者がいて、そのような他者の存在が、宗教間対話論では最初に取り組むべき問題なのである」(同書、132頁)。しかし、「対話を拒んだり、対話から構造的に排除される存在」との間における対話という問題に、宗教間対話論を含む一般対話論はほとんど取り組んでこなかった。ここに従来の対話論の限界があることは確かである。

3. 「『対話』の比喩の問題は、対話主体の双方が、最初から同等の位置にあり、同様に働きかけを相互に行うという想定にある。この前提は誤りであるし、なおかつ『対話』の言葉は宗教学の領域を回復するにはあまりに脆弱なスローガンであると筆者は考えるのである」(同書、136頁)。藤原は、「宗教学では『対話』よりも『批判』としての比較を行い、それによりただ地域研究の成果や批判派の議論を受け売りするのではなく、それらと刺激的な関係を築くという道」(同書、139頁)を提案している。

3 東アジア・キリスト教の比較研究

以上の問題状況に対して、ここでわたくしが提案したいのは、具体的な場にもどって、いわば現場から議論を組み立て直すことである。つまり、宗教間対話一般に関わる理論構築に向かう前に、宗教的多元性が個々の宗教また社会においていかなる仕方でも問題化しているのか、そこからどんな取り組みが行われつつあるのか、を実証的に検討することである(芦名、2007)。わたくしの場合、このことのために、東アジアのキリスト教の比較研究という視点から議論を行ってみたい。ポイントは以下の通りである。

1. 東アジア・キリスト教の宗教状況と近代化(東アジアの共通状況)
2. 民族主義との関わりから見た、日本、韓国、中国におけるキリスト教の多様性
3. キリスト教は民族主義といかなる関わりを構築しうるか。民族主義との断絶か、民族主義への同化か、あるいは……。
4. 寛容の場としての公共性(齋藤、2000)と東アジアにおける宗教間対話の意義。

4 むすび

宗教的多元性が提起する問題をキリスト教思想研究において取り組む場合に、共同研究あるいは研究者のネットワークが重要な意味を持つてくる——もちろん、研究において最

終的に問われるにはそれぞれの研究者の力量ではあるが——。というのも、多元性が含む諸問題は多様かつ多面的であり、個々の研究者がそれぞれの立場からその全貌を視野に入れることはきわめて困難だからである。本研究会が、その共同研究の場としてそれほど機能できたかについてはここに出席の方々の評価を待つことにして、本研究会はこれから試みられるべき共同研究の一つの始まりであると言えるのではないだろうか。わたくし個人としては、先に見た東アジアにおける宗教的多元性の問題を具体的な諸宗教の実態に即しつつ検討し、また民族主義あるいは近代化の文脈を視野に入れた新たな共同研究を今後も試みて行きたいと考えている。

<文献>

芦名定道（1994）『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。

（2007）「東アジア世界における宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『対話と寛容の知を求めて——人文学の未来』（下巻 『新たな人類知を求めて』）京都大学学術出版会（刊行予定）。

小坂井敏晶（2002）『民族という虚構』東京大学出版会。

齋藤純一（2000）『公共性』岩波書店。

高橋哲哉（2004）『教育と国家』講談社現代新書。

藤原聖子（2001）「空転する「対話」メタファー」、『宗教研究 特集：近代・ポスト近代と宗教的多元性』（日本宗教学会）第75巻—329、123-148頁。